

選定理由 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

形態 原記載は Bruguière (1792 in 1789–1792: 497–498, no. 39, as *Cerithium zonale*) であるが、この学名を本種に用いるには疑念が残る。原記載には図がなく、産地も「Je ne connois pas la patrie de cette coquille」(私はこの貝の出自を知らぬ)とされ、ただ異名表の中に Linnaeus (1767a: 1232, no. 604) の「*Trochus striatellus*」(産地は「in M. Mediterraneo」つまり地中海, 原記載は Linnaeus, 1758: 760, no. 525) が疑問符付きで挙げられるとともに, M., S. & A. Lister (1770: pl. 1018, fig. 81) の図示個体(二語名法適用外, 産地は「Jamaica, Barb.」即ちジャマイカとバルバドス)を「想起させるが, Lister には記載文がないので異名表に含めなかった」という趣旨のことが書かれている。しかし Dodge (1958: 215) によれば *T. striatellus* は正体不明のままであるし, Lister の図示個体は一見して本種とは異なる種であり, 両者の産地も地中海とカリブ海のため本種と同種とは考えにくい。*C. zonale* が本種とされたのは Kiener (1841 in 1841–1842: 62–63, no. 47, pl. 8, fig. 1) が発端らしく, そこに図示された個体(産地は「Habite les mers de l'Inde et celles de la Chine」, インドと中国の海)は確かに本種であるが, Lamarck の標本と明記されている一方, Bruguière が *C. zonale* の記載時に用いたもの(つまりタイプ標本)とは記されていない。だとすると単に Kiener が *C. zonale* をタイプ標本ではない標本に基づいて誤同定し, それが現在まで連綿と伝えられている可能性も棄却できない。ここで直ちに結論を下すことは不可能なので, 当面は慣用法に倣って *C. zonale* を本種の学名とするが, いずれ改めて慎重な考証が必要である。また Higo *et al.* (1999: 87, no. G733) や MolluscaBase (2018) などは *C. zonale* の新参異名として *Lampania aterrima* Dunker, 1877: 70, no. 12 (タイプ産地は「maris Japonici」, 日本の海)を挙げているが, のちに Dunker (1882: 109–110, pl. 5, figs 7–8) が公表した図を見るとこれは本種でなくウミニナである。殻長約 40 mm, 殻径約 13 mm。細長い塔形で厚く堅牢, 螺層の膨らみは弱く, 縫合はわずかに縊れる。殻表は太く粗い螺肋と彎曲した軟状の縦肋をもち, 縦肋は肩部で低い結節状をなす。螺肋は濃茶褐色で肋間が白い個体が多いが, 縫合下や周縁に幅広い白色螺状帯を巡らしそれ以外は濃褐色の個体も現れる。殻口は縦長の菱形で, 外唇後方に大きな彎入をもち, 前方は袖状に張り出す。内唇後端に強い滑層瘤を有し, 軸唇は幅広く白色で光沢がある。前管溝は短くて幅広い。蓋と頭部-腹足はウミニナとほぼ同様(高重, 2019: 69, text-figs に生体写真あり)。

写真: 備前市久々井, 2021年4月30日, 福田撮影。



分布 タイプ産地は上記の通り不詳。多くの文献で「北海道南部以南」に分布するとされているが(e.g. Higo *et al.*, 1999; 長谷川, 2017: 793–794, pl. 61, fig. 14), 北海道の貝類相をまとめた主要な文献(Schrenck, 1867; 八田・佐々木望, 1910; 木下虎・諫早, 1934; 木下虎, 1937; 黒田・木下虎, 1951; 石川政, 1953; 波部・伊藤潔, 1965; 石山, 1970)には本種への言及がなく, 具体的な出典を見出せていない。実際の北限は太平洋側が宮城県松島湾で(Kojima *et al.*, 2005: 686–693; 鈴木孝, 2016; 金谷他, 2018: 43, 45, 46, 47, fig. 3f(right)), 日本海側は男鹿半島以南(西村正・渡部景, 1943: 66, no. 61)に知られ, 四国・九州を経て南西諸島(久保, 1995: 43, fig. 3)まで見られる。国外は朝鮮半島(權他, 1993: 69, fig. 26-8-1-2; 270), 中国(Ma, 2004: 39, pl. 016, fig. G; 楊他, 2013: 36, 37, fig. 098; 王他, 2016: 23, no. 59, text-figs), ベトナム(Hylleberg, 2000: 525; Hylleberg & Kilburn, 2003: 36), シンガポール(Tan & Chou, 2000: 76, text-figs), フィリピン(Lozouet, 2008: 286, pl. 88, figs 6–8, as *Batillaria zonale* [sic]) などから記録があるが, Ozawa *et al.* (2009: 503, 515m fig. 3) は分子系統解析の結果, 香港産の一部とベトナム, シンガポール, フィリピンの個体が本種とは異なるクレードを形成したことから, 後者を未記載種とみなしている。なお本種は1930年代に北米カリフォルニア州に *Magallana gigas* (Thunberg, 1793) マガキとともに移入されたと言われ, 現産個体に基づいて消化器系の詳細な解剖(Driscoll, 1972: 275–385, figs 2–8)や直達発生であること(Behrens Yamada & Sankurathri, 1977: 179, fig. 1)が報告されたが, Hanna (1966: 44–45, figs 37–39)の図を見ると移入されたのはホソウミニナまたはウミニナであって本種ではない。

生息状況 内湾の砂泥干潟中～下部の表層に産し, ウミニナやホソウミニナに随伴する場合も多いが, 本種はより汀線に近い限られた範囲に見られることが多い。本州・四国・九州のウミニナ属3種は戦後にそれぞれ大きく産出の状況が変化し, ホソウミニナは現在も全国各地に多産するものの, イボウミニナは激減して絶滅の淵にあり, ウミニナはその中間である。本種は東京湾, 相模湾, 浜名湖, 伊勢湾などで絶滅し(池田等他, 2001: 33, fig. 10; 黒住, 2011: 425; 木村昭・福田, 2012: 31, text-figs a–b), 健在と呼べる場所は英虞湾, 周防灘西部, 油谷湾, 羊角湾などわずかしか残されていない。一方で沖縄島以南には現在も高密度で多産する。九州以北での減少要因は明確でないが, 水質の悪化が打撃を与えた可能性がある。瀬戸内海中央部では香川県瀬尾・Tanangonan (2014: 92, no. 45, pl. 1, fig. 7) が2009–2013年に調査した結果, 「著しく磨滅した死殻がごく少数採集されたのみ」と報告した。岡山県でも同様に, 古い死殻は近年も岡山・玉野・倉敷・浅口・笠岡各市で得られている。特に笠岡湾奥部では比較的多数の死殻が干潟に転がっている。また, 児島湖周辺の明治以降に造成された干拓地からも死殻が現れ, 大きな破損がない殻も多い。このため, 比較的近い過去まで県内に多産していたことは確実であるが, 干拓や埋め立て, 護岸による干潟消失に水質悪化が重なって, 1960年代以降に大半の個体群が致命的な打撃を被ったと考えられる。21世紀に入ってから生貝は長く再発見されなかったが, 2020年9月, 備前市久々井の砂泥干潟で個体群が見出されたとの情報が某氏より寄せられた(写真)。同地では2021年4月の調査においてもごく狭い範囲に棲息が認められたが, 密度は低く個体数も少ないため, 県内唯一の貴重な個体群として保全対策が必要である。

(福田 宏)